越中立山、奥州宇曾利山、信州淺間嶽、豆州箱根、肥後阿蘇山、奥州外ケ濱等には、天道あり、地獄あれ共、禪定の行者ならずしては、目のあたり見る事なし、故に所說にも虛談多し、又見て眞實を語るとも、人怪しみて信ぜず、又書に傳ふる處もなし、但今昔物語に曰、越中國立山といふ所に、昔しより地獄有といひ傳へたり、○中略此等の外、唯口述のみなれば、あるなしの論區々也、猶委しくいはんにも、常に人の至らざる地は、必ず疑ひあやしむなれば記さず、適西州に一大地獄有、此地は行者ならざる者も容易く至る所なれば、形勢を筆して、其見ぬ人に便りとす、予肥前國に遊歷せし頃、肥前國温泉山は、島原の領地也、海中に差出て、三方は海也、後に妙見山普賢山とて雙立り、地續より至れば、其兩山の間の嶝を上り下り行、半途に島原侯の番所あり、入切手を取て行也、春夏は浴湯の人もまゝ有とかや、此地は彦火々出見尊を祭れり、往古は僧坊甍をならべ、巍々たる大伽藍なりしを、切支丹耶蘇宗門に歸依して、一旦破却せられ、今纔に一乘院と云一寺のみ、曠々として哀れ寂しき有樣なり、寺邊に少々平地なる所一村有て、浴室の人家あり、予は十月半に至りしかば、人跡稀に雪風烈しく、別して寂寞たり、一山皆赤土にして、瓔珞つゝといふ樹木滿山せり、温泉の湯氣にや、歸り花多く唉出たり、其平地に温泉あり、人家の塹溝にも、道路の石間も、熱湯迸り出、湯氣立昇り、山間を覆ふ計り靄々として晝は湯けぶりと見へしも、夜は皆火の如く燃上り、所所に石鳴ひゞきて唯物すさまじき體也、流出る温湯は、惡臭く鼻を突、土石皆赤く錆て、更に自餘の氣しきなし、翌日地獄廻りすべしとて、案內者に連て行しに、先三途川と名付る細き流れあり、其川向に奪衣婆（ダツエバ）有、又側に牛頭馬頭石有、何れも地上を出る事四五尺也、近寄見れば、左も尋常の岩なれ共、少し隔て見れば、姥石は川端に臨て、少し俯伏たる樣實に地獄の繪圖に見るが如し、髮打かぶりすさまじき形と見ゆ、牛鬼の角ある、馬鬼の蹲りたる樣、罪人を待けしきに彷彿たり、六道の辻には地藏石ありて、傍に小石多く積たる、宰の河原とやいふ、胎內潛り、岩針の穴通し抔